

# 長野県革新懇ニュース

2016年10月号  
(発行日10月10日)  
年会費5000円(送料込)  
振替 0510-3-15971

208

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会  
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕  
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内  
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 佐々木都さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 県政シンポジウム、大北森林組合問題の諸行動  
県母親大会、原発反対柏崎集会
- 4面 随筆「満州へ村民を送らなかつた村長」堀井正子さん  
無言館コンサート  
映画評論「ジョニーは戦場に行った」

URL: nagano-kakushinkon.com



1928年佐久市・臼田生まれ。老舗旅館「清集館」女将。地域や女性のための活動を長年続け、随筆集、短歌集を多数出版するなど、文筆家としても知られている。和服と笑顔がトレードマーク。6月に米寿を記念し、「88歳・佐々木都という生き方」(加瀬清志編)を刊行。

## 読むこと、書くこと、そして、行うこと

佐々木 都 さん

(佐久市臼田「清集館」女将)

### 死を覚悟して行った 学徒動員の辛い思い出

Q 米寿を迎えられたということ、大変おめでとうございませう。今日は、佐々木さんの生き様を伺いたいと思います。最初に戦争中の体験をお聞かせください。

当時、私は野沢高女の女学生でした。戦時中でしたので、私たちは学徒動員で名古屋の陸軍軍需工場へ行くことになりました。実は、私の父は歳をとっていたので戦場に行かなかった。父の兄弟も招集されたのですが、戦地に行かなかつたんです。街を歩くと戦死者のある家には「誓れの家」と書いた白木の表札が門柱に下げられている。当時、私の家には何もない。そんなときの勤労動員でした。戦争に協力できるところに行けるん

だつたら頑張ろうと張り切っていました。

工場では鉄砲の玉を作っていたんですが、当時は何をやらされていたのか知りませんでした。何もかも秘密でした。ただ、私たちが働かないと戦争に負けてしまうと、とにかく頑張らなくてはという思いだけでした。工場では必死に働きました。いづこで死んでもいいように親の名前の入った名札を胸や両足など4カ所に書かされました。爆弾にあたって身体がバラバラになつても、誰か分かるようにとのことでした。名古屋には9カ月いました。

その内、男の人が戦地に行つて先生になる人がいないからと、その時できた専攻科の試験を受けました。幸い私たちは受かつたんですが、受からなかつた人が少数いました。帰れる人と帰れない人が決まつた時、とても複雑でした。帰れると決まつた人はついニコニコしてしまい、それを隠すのが大変でした。私は親友をおいて帰りました。辛かつたです。卒業しても彼女は私に逢おうともしませんでした。そして、担任教師を恨む、長野県は嫌いだと香川県に行つてしまいました。今はもう仲良くしています。友情を壊すことなど、たくさんありました。

学生服代わりに着たのは、親の着物をほどこして作つてもらった、今でいう標準服でした。絹物が多いです。なぜかという、木綿は包帯などに使う、絹物は傷が化膿してしまうので、木綿は大切なものだったんです。食べ物も酷かつたです。何であんなにお米がなかつたのか、とにかく働いているとき、ご飯は丼の

蓋にチヨコつと、それにサツマイモが三切まぶしてあるようなものでした。お味噌汁は赤味噌、佐久の麴味噌のお味噌汁がほしかつたですね。おみそはふりかけ。ふりかけがないとお塩でした。

### 戦争の悲惨さを 安倍さんは学べべき

Q 「16歳の兵器工場」をまとめられた経緯をお話し下さい。

そんな経験もあり、苦勞を共にした同級生でした。皆仲良く、たびたび同級会をしました。その席に山室静先生がいらしたことがあります。山室静先生は専攻科の時の恩師です。戦時中、修学旅行に行けなかつたので私たちがも修学旅行に行こうということ、1964年に学生時代に働いていた名古屋に行き、記録集を出しました。

ある同級会の席で戦争中の思い出を話していると、山室先生がそんないろいろな思いを持っているんだつたらまゝとめてみないかと勧められたんです。じゃあ、呼びかけようということで、100人全員にアンケートをとり、書かない人にはとにかくアンケートだけでも協力してもらいました。はじめは賛成が少なかつたんですが、最終的には40人書いてもらいました。私たちに何かがあつて、「書いて」「やだ」「そんなこと言わない」ということが言える仲でした。それを「16歳の兵器工場」というタイトルで毎日出版社が出てくれました。

「歴史を開く自立の家」  
Q 「歴史を開く自立の家」開設の動機は？  
もともと、もろさわようこさんが始めたんです。もろさわさんと、市川房江さんが佐久病院に入院されていたときにお見舞いに行つて知り合いました。もろさわさんは特別な人で、地元の望月ではあまり受け入れられない人だつたんですが、望月に自分の山(土地)があるから、「自立の家」をつくるということになりました。ところが、家を造るのにトイレはいらないうい、お水は二升瓶に入れて登つてこいという趣旨だったので、私は、そんなことではいけないということでやり合つ



戦争体験を綴つた2冊の本

ちやつて、縁遠くなりました。ということで、私は自分で「自立の家」と名付けて集まりの場をつくつたんです。看板は、市川房江さんが書いてくれました。当時は、女性はもの言えなかつたもんですから、いろいろ悩み事を聞く場にしようと考えました。私が50歳の時です。丁度、家に跡取りが入つて離れが空いたので、そこを活動の場所にしました。ところが、ここ(歴史を開く自立の家)に姑さんが来ていて、お嫁さんが自分の悪口を言っていると思う。お嫁さんが来ると、姑さんがわしの悪口を言いにいったのではないかと疑う。これではいけないなと思ひ、ここへ来て幸せになるんだよ、それで幸せを喋ろうよとなつて「しあわせ教室」に変えました。始めは女性の自立とか悩み事相談が中心でしたが、その後女性の集まりになりました。できるだけ皆が話せるように、今日誕生日は誰かって尋ねるんです。私つて答えると、じゃあ隣の人の、司会やつてと言つて、皆が喋れるようにしました。だから、始めはあそこへ行くこと皆喋らせられるから嫌だつたという人もいましたけれど、だんだん皆がお喋りするようになつて

【2面に続く】